
オタクの恋愛大作戦！！

義経

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクの恋愛大作戦！！

【Nコード】

N3333X

【作者名】

義経

【あらすじ】

突然だけど、僕はオタクだ。アニメやライトノベル、漫画が好きだ（エロゲはやったことないが…）。そんな僕、黒田将史はある日の放課後、親友からこんな事を言われた。「俺、好きやつがいるんだ」「……はっ？」そして親友の好き人は学園のアイドルの定山いづみだった。将史は親友の頼みで、親友の恋のキューピッドになる事になった。この物語は過去に影のある、オタクの少年とイケメンの少年、そして学園のアイドルとその愉快的仲間達との青春と恋の物語……

更新はノロノロです。ですが、楽しんでくれると幸いです！
感想くれると嬉しいです！

親友の頼み

「俺、実は、定山さんの事が好きなんだ」

「……………は？」

「こんにちは、今、親友から好きな人のカミングアウトされた、黒田将史ろだまさひみです。突然ですが、僕はオタクです。オタクと言ってもラノベや漫画、アニメが中心で、エロゲとかやったことない中途半端なオタクだけだね。」

「僕の紹介はまた追々詳しくやるとして、まず向かいにいるやつを紹介しよう。」

「こいつの名前は相良恭平さがきょうへい。僕の幼なじみにして親友である。でも、僕とは違い、オタクじゃないし、イケメンで頭も運動神経もよい。部活はしてないけど、何に入ってもレギュラー確定だろう。……………リア充は爆発しろ。」

「コホン、とにかくそんなこいつがいきなり告白（僕にではない、ここ重要）してきた。」

「なんでいきなりそんな……………」

「至極当然である。」

「いや、まさならそういう事詳しいかなくて。ほら、そういうアニメみてるし」

「いや、アニメでお前……………」

「つまり、アニメにも恋愛要素は多いって言いたいらしい。だが、

いくら僕でも二次元と三次元をごっちゃにしない。

「それに、そういうのに興味なさそうだから、定山さんを好きになる事はないと思ったから……」

「……なーる」

まっ、これがどういう事を説明するには、定山がどういう奴かを知ってもらう必要がある。

本名を定山いづみと言う。長く綺麗な黒髪をしており、瞳も同じく、漆黒の黒。また、全体的にスラッとしているが、出るところは出ているナイスなスタイルをしている。さらに文武両道、容姿端麗で、非公式ファンクラブもある、非の打ち所のない学園のアイドルである。

恭平が心配しているのは、定山に僕が惚れてしまうのではないかという事だが

「……まっ、そうだね。僕はオタクだし」

「いや、そういう意味じゃ……」

本当は、中学時代のとある出来事で人と関わるのがまだ少し苦手だからである。まあこの話は追々する機会があるかもしれないからその時に……

話はそれたけど、今は恭平の話だったな。

「大丈夫、分かってっから」

「何だよからかうなよ」

「んで、僕にそんな事言っでどうすんだよ」

「……／＼」モジモジ

「モジモジするな。顔を赤らめるな。気持ち悪いんだよ」

「何もそこまで……」

「…話さないなら帰るぞ」

「…待って！分かった言う、言うから」

帰ろうとしたら必死の形相ですがりついてきた。イケメン台無しである。

「実は俺、定山の事が」

「それは聞いた」

「そだっけ？」

こいつ殴ってやろうか

「冗談だつて！殴ろうとしないで！……つまり何が言いたいかというと、協力して欲しいんだ」

「定山との中を？」

「ああ」

「……」

何で僕何かに……さつきも言ったが僕はオタクだ。数少ない友達とオタクをしたたりする。それに、中学のあの事件をひきずっているため、初対面（特に女子）には非常に暗くなる。そのため、女子に気持ち悪がられる。

そんな僕に相談するなんて、本当に折半詰まってるんだろうな。正直な話、やりたくない。出来るだけ人と関わりたくないし、あまり役に立てなさそうだし。でも、中学の頃、あの地獄から助けくれたのは、この恭平だ。いつも味方をしてくれた。そろそろ恩返ししてもいいんじゃないかと思う。だから

「……分かったよ」

「えっ？」

「手伝ってやるよ、お前の恋」

それに、自称親友の頼みだしね。

「ありがとう！ありがとう！！」

「うわっ、だから抱きつくなって！」 何かいきなり断りたくなってきた。この先、大丈夫かお前……

とりあえず協力する事になり、作戦会議をする事にした

「んで、恭平は一人でどれくらいまで進んだんだ？定山と」とりあえず今の現状を把握しとかねばな。

「最近になって、やっと定山さんのことをちゃんと見る事が出来るようになりました！」フンス

「……で？」

「でって？」

まさかとは思うが

「これだけか？」

「ああ

「……」

「……」

「しょぼすぎるだろ！今まで何してたんだ、このバカ！」

マジでこれだけだったとは…恭平って見た目にいわず、シャイなんだよな…

「だから、お前のアニメとかの恋愛知識に期待してんじゃないか！」

「確かにその手のものもよく見るが、現実の恋愛何か知らんからな

「恭平も知ってるだろう！」

「お願い、頼むよお。こんなことお前にしか頼れないんだよお」

「……はあ」

そう言われると弱いなあ。

「でも、そもそも」

出会ってすらないって話あんま知らないんだよな。最近では既に知り合ってて、展開するアニメとかが多いんだよな。

「でも、とりあえずあつちと話せるように　いや、知り合いにならないと」

そう言って、また一人頭を使う。

CLANNAD…はダメだ、出会った後がメイン。学校に坂ないしな。あの花…は幼なじみ集団の話だし。乃木坂春香の秘密…はそもそもオタクじゃないしな、それだったら話やすいし、関わりやすいんだけど…

「うーん……」

頭を使ってもいい考えが浮かばない。

(ジャンルを変えて考がえるか……)

そこから考える事数分。閃いた。

「でも、こんなんでいいのかな……」

「えっ？思いついたの？」

「まあ、一応」

でも、これはギャグラノベと言ってもおかしくないものから抜粋したやり方だ。非常に印象に残るし、会話しやすい状況を作れるが

……

「でも方法がな……」

「何でもやるから頼む！」

必死に頼む恭平。そうだよな……こいつも必死だしな。なら恭平の変わりに泥を被ってやるか……

「よし！決めた。これから作戦を伝える。作戦開始は明日の放課後、心して聞け！」

「了解！」ビシッ

何なんだこのノリは……恭平も敬礼してるし。先行き不安だな……

「よし、では作戦を伝える。作戦は」

こうして僕達の最初の作戦会議は終わった。明日の初作戦ミッションの成功を祈るばかりだ。

不安だなあ……

ファーストミッションとファーストコンタクト

「よし、今から作戦を開始する」

「OK！」

時はたつて、翌日の放課後。今から僕達はミッションを実行しようとしている。

まず、このミッションについて説明しよう。これは先ほど述べたように、某ライトノベルからの抜粋である（詳しくは第一話を参照に）。ミッションの概要はこうだ。

まず、今日の掃除当番である僕が教室で僕と恭平の二人だけになるように仕向ける。そして、定山が教室の前を通るのを待つ。そうしたら、予め用意しておいたバケツの水をぶちまける。さすがに直接は不味いから、ずらして濡れるか濡れないかのギリギリにする（僕担当）。そうしたら、それをきっかけに、恭平が出てきて会話に入る（ここは恭平しだい）。心配していい人アピール+会話が弾めば満点ってところだろう。

一見問題なさそうに見えるが

「定山が通らなかつたらどうしよう……」

「無論、来るまで何日も続ける」

「……」

そう、定山が通るといふ確証がないのだ。それに、うまく水を当てられるかの問題もある。後者は恭平に指摘してないが……ん、まてよ

「もしかして来るまでって事は毎日掃除当番？」

「もちろん！」

「……orz」

早くも挫折しそうだ……早く別のミッションを考えたいほうがいいかもしれん。

そんなことを考え、思考に没頭し始めたところ

「きつ、来た！」

「！！！」

まさか本当に通るとは……そうか、今はテスト2週間前だから図書館にでも行つて勉強して、荷物を取りに来たつてところか……

ちなみに推理が凄く見えるけど、定山がテスト前に図書館に行くのは周知の事実だし、手ぶらだしな。

まあ、とにかく来てくれたのは好都合だ。後は僕しだいだ。

「いいか、手筈通りやるぞ。ぶちまけた後にこっちに来いよ」

「わっ、わ、わ、わか、分かった」

「ビビりすぎだ」「ベシッ

恭平の頭を叩く。

「心配すんな、フォローはしてやる」

ちゃんと出来るか不安だが。

「……ああ、頼むぜ、まさ！」

「おう、行ってくる！」

こうしてバケツを片手に定山の元へ向かった。

今、僕の左手には水の入ったバケツがある。そして僕の目は定山の後ろ姿を正確に捉えている。

じっと息をこらしてタイミングを待つ。そして、待つ事数分。よし　今まさに駆け出そうとした時、一つの失敗に気づいた。今、僕の眼中には文字通り定山しかない。さながら獲物を狙う獣のようである。しかし、ここまで集中していると、人間なら周りへの視野が狭くなる。そして僕も例外ではなかった。隠れている時は気付かなかったが、走り出し、加速した時に気付いてしまったんだ

前方にぞうきん（verbいしょ濡れ）があることに

気づいても時既に遅し。加速し始めた僕は止まれず、ぞうきんを踏み、体制を崩した。

「おわっ！」

何とか転ぶ事だけは逃れたが、今だ状況は最悪。もう当初の目的を達成する事は出来そうもない、許せ恭平。

それどころか、某ラノベよろしく、定山に水をぶちまけちまう。

定山は鉄○ほど屈強じゃないから水なんか被ったら大変だ。

「まずいつ！」

「……！」

僕の声が聞こえたのか、定山が気づいたようだ。目を見開いている。驚いて呆然としているみたいだ。定山が避けてくれる事は期待出来そうにない。僕も避けられない。なら、本当はやりたくないが、もうこれしかないだろう。

「どおりやあ……！！！」

大きな掛け声と共に、気合いをいれ、定山が間合いに入る前に大きく手を上に挙げる。

つまり、定山が避けられない。僕も避けられない状況で両方が無事というのは無理。だが、定山にかけるわけにはいかない。

そして、その答えは

「……………」バシヤン

そう……………自分だけが水を全部被るという事だ。そうすれば、どうにか定山は助かる。そして、見事、当初の作戦失敗……………

「嫌だ、何か急に水被り出したんだけど」

「ていうか、近くにいるのいづみちゃんじゃね？」

「いづみちゃんにかかったらどうすんだ！」

「それにあれ、黒田じゃない？」

「うわっ、本当だ。マジきもっ」

周りの僕を非難する声。

(あ……………やっぱりダメだ、こっぴつの……………)

弱気になり始めた時に、ふと定山の方を見た。

「……………」

定山も呆然としている……………そうだ、暗くなってる場合じゃない！早くここで言い訳しないと、恭平が来ちゃう！…どうする……………」

「……………クシユン」

くしゃみが出た。まあ、さすがに秋の夕方じゃ寒いわな。

「あっ！はっ、早くその服、どうにかしないと…！どっ、どっしよっ……………」アタフタ

定山まで取り乱し始めた。

「いや、だからえっと」

うまい言い訳が見つからない。

「って、うわっ！何やってんのまさ…！」

そこに恭平登場。

「き、恭平…！」

「どっししよう、びしょ濡れだ、寒そうだ、どっししよう」アタフタ

恭平もおたおたしていた。

「……………とりあえず周りの視線が痛いから、教室に入ろうか……………」

水を被った本人が一番冷静だった。

「……」

「……」 チラチラ

「……」 ソワソワ

今、僕は教室にいる。そして、何故か定山のジャージを着ている。その定山はというと、何故かチラチラこつちを見る。そして、恭平はそわそわしている。どうしてこうなった

水を被った僕はおたおたしている恭平と定山を連れて、何とか教室に戻った。

「まっ、まずは着替えないとな。あっ、でも今日体育ないからジャージないじゃん！」

「僕もないや……」

「保健室……はもう空いてないし、うわぁ、どうしようー！」
「……クシュン」

本格的に寒くなってきた。

(どうすっかなー。でもまっ、何とかなるだろう。体は丈夫だし。)
それよりも、ミッシヨンは失敗したが、思わぬ急展開で定山と恭平を引き上わせる事に成功した。これは収穫だ。こっからは何のオタク知識もないから恭平に頑張ってもらわないといけない。でも役に立てた事が嬉しい。そう嬉しさに浸っていたところ、定山がおずおずと声をあげた。

「あの……私のジャージでもいいなら貸しましょうか？」

あっ、そういえば、定山は隣のクラスで今日体育あるんだっけ。そんなことを考えていると何を勘違いしたのか定山が慌てて言った。

「い、いや、変な意味じゃないのよ！ただ、将史くん達のクラスは体育なかったみたいだから……それに、ジャージだったらそんなに大きさが違うって事はないだろうから……」

定山は一気にまくし立てられた。

ふむ、まあ確かに、定山が小柄でも、ジャージなら何とかはけるだろう。でも、女の……それに、恭平の想い人のはくつてのものなあ。

「ああー、気持ちは嬉しいけど」

「ありがとう！定山さん！早くジャージに着替えようぜ！」
恭平が僕の言葉を遮って言った。

(こいつ、気にしないのか……)

「いや、でも悪いし」

「お前、定山さんの好意を無駄にすんなよ！いいから脱げって」

「ちよつ、バカ、脱がすな！」

「いいからいいから」

「……／＼」ポツ

「はっ、まつ待て、本当に待て。定山が見てる！これじゃ僕達は変態だ！……やめろ、分かった、着替える着替えるから」

恭平ともめる事、数分。ようやく恭平の暴走はとまった。そして、その間も定山はバツチりこつちを見ていた。

そして、ジャージに着替えて今に至るわけだ。

「……／＼」

「……」ソワソワ

こういう時、アニメとかでも主人公はテンパってたしなあ。ただのオタクには荷が重い。でも、とりあえず話を切り出さなければ。とりあえず冷静になれ、無難な事を言うんだ。そう言い聞かせて僕は話を切り出した。

「じ、ジャージありがとう!」

声が裏返った。死にたい。

「う、うん」

「ちゃんと洗って返すから。あつ、でも、明日もそっち体育あるんだっけ」

「だ、大丈夫ジャージ着なくても。私、暑がりだから」

さすがにそれは嘘だろう。セーター着ているし。

「心配すんな。どうにかして、明日絶対返す」

「……分かった」

やっと納得してくれたか。

キンコーンカーンコーン

話が丸く収まりそうな時最終下校を告げる鐘がなった。

「僕達はそろそろ帰るね」

「あつ、うん。じゃ、また明日、将史くん」

「うん、また明日、ジャージ返しに行くから」

そういつて定山はその場から走って去ってしまった。そして、その場には僕と恭平が残る。

「……恭平」

「……」

返事がない。ただの屍のようだ。

「おい」「バシッ」

「……はっ」

「お前なあ、ほとんどしゃべってねえじゃねえか」

そう、ずっとボケっとしていて、ほとんど会話に入らず、相づちを打っていただけだった。

「いやいやボケつとしちゃうって！定山さんがあんな近くにいたんだぜ！会話したんだぜ！また明日会う約束したんだぜ！！そりゃ普通そうなるって！！！！」

「そういうものか？」

よく分かん。

「それに、まさにも驚いたぜ」

「……？」

何が？

「だってお前、初対面の　しかも女子と普通に喋ってたんだぜ！」

そうか、確かにそうだ。普段ならすごい無口になってキモがられるのに、今日は普通に話せた気がする。まっ、緊急事態つてのが原因だろうけど……

そんなこんなで、初作戦と定山と始めての邂逅は失敗とアクシデント、そして恭平の定山絶賛の話で幕を閉じるのであった。

将史くん

んっ？そういえば僕って定山に名前教えただっけ？

将史の苦悩

「まさ、本当に助言は何もなしかよお」

「ない。昨日、ラノベ、漫画、アニメを見返してもなかった」

次の日、僕と恭平はジャージを定山に返すべく、昼休みに隣のクラスに来ていた。ちなみに、体育は6限。ここで返さなければ、もれなく定山は体育見学になる。

そして、返すついでに恭平も連れて行って話をさせようと思いついて、連れて来たが、助言がないと知るとさっきからそわそわしっぱなしである。

「ていうか、ジャージ渡すの僕なんだからそんなに心配しなくても

」

「分かってねえ、分かってねえよ！まさ！例えそうだとしても、そういう問題じゃねえ！あの定山さんの近くに行くんだ！そんなに冷静でいられる分けない！定山さんはな、容姿端麗、文武両道。人当たりも良くて、正確もおしとやか。学園でも知らない人はいない学園のアイドル！！まさの事情は知ってるけど、彼女に興味を持ってないってというのは可哀想だな。それにまだあるぜ、定山さんって」

また始まったよ恭平の定山さん自慢。それに事情知ってるんなら言わないで欲しい。結構気にしてるんだから。ていうか二次元キャラの方がかわいいと思うけどなあ。撫とか八九とか、竹代とか……そこ！ロリオンとか言わない！

「っと、早く行かないと休み時間終わっちゃうぜ」

外れた思考を無理矢理戻して恭平に声をかける。

「おっと、そつだな。んじゃ、先陣は任せるぜ！」

「こいつ……」

定山さんのことになると、途端に入たれるな。

「ま、僕が借りたジャージだし、僕が先に行くからちゃんとして
こいよ」

「おっ」

恭平の返事を聞いて、ドアに手をかける。

ガラガラ

「失礼します……」

緊張して声が小さくなってしまったが、タイミングが悪かったの
か僕の一言でその場が静まりかえってしまった。

「……こいつ」

みんなの視線がこちらを向く。

「何、あの子教室の前でつったってんの？」

「ああ、あいつあれだよ。ほら、いつもキモオタ同士でオタトークしてるやつだよ」

「あー、知ってる」

「そういえば、この間あの人に話掛けたら急にうつ向いて、モジモジし始めたんだよお」

「えー、キモ」

「……」

教室のあちらこちらで聞こえてくる僕の罵倒。ひそひそ声だから聞こえないと思ってるのかもしれないが、静まりかえった教室では、はっきり声が聞こえる。

僕がその罵声を受け、成す術もなく立ちつくしていると、後ろから恭平が入ってきた。

「うっす、隣のクラスの相良恭平っす。ちょっと定山さんにようがあつて来たんだけど、定山さんいる？」

そういつて僕の肩を組む。僕が困っている時にいつつも助けられる。安心させてくれる。

(本当……かなわないなあ)

「おっ、相良、定山さんならいないぜ」

クラスの一人が恭平を見て声を掛ける。当然、僕は無視だ。

「でも、すぐ終わるって言ってるの聞こえたから、もう帰ってくると思うよ」

「了解！じゃ、待たせてもらおうよ」

「おい恭平、今週末のサッカーの試合なんだが」

「おうっ、今度はなんだ」

たちまち恭平の周りには人だかりが出来ていた。定山と話している時からは信じられないけど、普段は気さくで、何でもそつなくこなす、学年の人気者だ。そういったところでは、学園のアイドルの定山とはお似合いだと思う。

「やっぱり相良くんってかっこいいよねー」

「本当本当。でも何で黒田なんかと一緒にいるんだろ」

「本当だよなー、相良くんも、もっと違う人とつるめばいいのに、このままじゃ自分を下げちゃうよ」

ああ、あの子達の言う通りだ。僕なんかと恭平が一緒にいるのはおかしい。本当に僕なんかといると恭平の地位その物が下がる事になる。そうしたら学校生活もそうだが、定山ともきつと

暗い気持ちのまま、窓際後ろから2列目の座席に書いてある「定山いづみ」の席に近づきそつとジャージを置く。

（このまま帰ろう。やっぱり迷惑になりそうだし。恭平は多分このままこっちにいるだろうから、定山と話せるだろう）

そうだよ、僕なんかいなくても、恭平なら何とかできる。結局、僕が出来る事は恭平の迷惑にならないようにするだけ。

そう言い聞かせて、定山のジャージを机に置いた時、ドアが開き、

教師に頼まれたのか、荷物を持った定山が入ってきた。

「将史くん？」

「!?!」

今まさに、ジャージを置こうとしたタイミング。恭平は話に夢中でまだ気づかない。

「あつ、えつとその、ジャージ……」

何とかその言葉だけを捻り出す。視線が恭平に集中している分減っているが、まだこちらを見る冷たい視線を感じる。早く帰りたい。帰ってラノベの続きを読みたい。

「ここ、置いとくから……」

そう言って帰ろうとする。

「あつ、ちよつと待って！」

そう言うと、荷物を教壇に置いてこっちに近づいてくる。

「……!?!」

定山が近づいて来ると共に周りの視線が険しくなる。そのせいで一瞬足がすくむ。その間に定山は急ぎ足で僕の近くにやって来る。

「!?!」

?、急に驚いた顔をした。何だ？

「将史くん」

「？」

「ううん、何でもない。それより、よかった。将史くんジャージ置いて帰ろうとするんだもん」

定山は何か言いたそうにしていたが、言つのを止め、それとは打って変わってほっとした様子で僕に声を掛ける。

「あっ、うん……」

昨日はちゃんと話せていたのに、またどもってしまつ。

「じゃ、じゃあ、僕はこれで……」

「まっ、待ってって」

そういつて定山は僕の袖を握ってきた。

「うわっ、定山さんに袖握られてる!」

「ていうか離れるよ!キモオタ!」

周りの罵倒も一層激しくなる。

「この前はちゃんと話せなかったから、今度は将史くんおちゃんと話したいなって思ってた」

定山は周りの状況に気づかないのか、僕にさらに話掛けてくる。

（何で定山にしろ恭平にしろ、僕なんかと喋ってくれるんだらう）

「でね、もしよかったらなんだけど」

「しかも無視してるし」

「本当ありえないよねえ」

「定山が話掛けるたびに状況が悪化する。

（そうか）

「史くん？」

（僕が困っているのを見ているのが楽しいんだ）

「将くん？」

（駄目だ。どんどん思考が鬱になっていく。でも実際そーいう事の方が可能性があるだろうなあ）

「将史くん!!」

「はっ、はい!!」

少し声を大きくして、僕を呼びかける。また思考に没頭してたよ
うだ。

「まさ!どうしたんだ!?!大きな声だして!!」

周りの集団から抜け出して、こちらに合流する。さっきの声は予想外に大きかったらしい。

「さ、定山さん。何かこいつやらかしましたでしょうつかでござい
ます」

恭平、君は何語喋ってるんだこいつは。

「いえ、将史くんがボーっとしていたので、少し大きな声で話の
ですが、驚かせてしまった見たいですね。すみません」
そういつてすまなそうに謝ってくる。

「あっ、いえ……」

「そ、そういえば、何を話していたんですか？」

空気が重くなったのを察して話題を変える。

「そうでした、では将史くん。携帯を出して下さい」

「？」

何を言っているんだ？

「携帯出してくれないと交換出来ないんですが……」

「????？」

まったく状況が分からない。さっきまで思考に没頭していたせいで何も聞いていなかったし……

「もっつ、出してくれないと、アドレス交換出来ないじゃない！」

「……は？」

いかん、緊急事態すぎて思考が働かない。

「さっきアドレスを交換しようと言ったら、頷いてくれたじゃないですか」

「……」

まったく記憶にない。どうやら適当に頷いたらしい。

「……もしかして、迷惑だったかな？」

今にも泣きそうな顔でこちらを見てくる。

「わ、わかったから泣かないで」

「っ！ありがとうございます」

輝かしい微笑みでそう言い、携帯をお互い近づけ、赤外線アドレスを交換する。

「……将史くんのアドレス」

すごい嬉しそうに、携帯を見つめる。（僕のアドレス何か聞いて、何考えてるんだろっ……）

「あっ、あのっ。よかったら俺とも交換して下さい」

急に頭を下げて交換を申し込む恭平。本当にさっきの人と同一人物だとは思えない。

「うん、いいですよ」

そういつて携帯を恭平に近づける。

「うわっ、来た！マジ感激です！」

「ふふっ」

感動している恭平と嬉しそうに定山を見て思った。

（そうか、恭平のアドレスを聞く口実だから僕のを聞いたのだから嬉しそうだったのか）

この後も予鈴がなるまで、ほとんど喋らず、相づちだけしていた。ちなみに恭平は話をしていく内にいつもの調子を取り戻したのか、軽快に喋っている。昨日とは本当に別人のようだ。定山も楽しそうに微笑んでいる。

完全に空気が違った。かといって場を乱せないで、そこから動けず、周りの「何でいるんだよ」オーラを一人受けていた。こういう時、助けてくれる恭平は話に夢中で最後まで僕のSOSには気づかなかった。

「では、定山さん俺たちは教室に戻ります」

「はい、ジャージありがとうございます。将史くん」

「……いえ」

「帰ったらメールします！ではまた明日！」

「はい、また明日」

そういつて僕は教室を後にし、自分達の教室に戻る。

授業が始まるまでの間、恭平が嬉しそうに何か言っていたが、何を言っていたのかまったく耳に入って来なかった。

授業が始まって、ラノベを読む気になれず、眠気に負け机に突っ伏した。

(昨日、洗濯、乾燥機、アイロン。慣れない事を行ったせいかな寝不足だ、昨日寝たの4時だしなあ。僕、何やってるんだろ)

もう考える事も面倒になったので、再び目を閉じて、今度こそ深い眠りについた

将史の苦悩（後書き）

将史のネガティブ思考爆発です。基本この小説の主人公は恭平とは漫才みたいなやりとりをしてるけど、引け目も感じています。この話で将史の学校での立場や状況などが少しづつ露になっています。次回は帰宅した後のいづみと将史のメールのやり取りを書くつもりです。いつ更新になるか分かりませんが……

電話にて

「ふう〜」バタン

家に帰って来ると、自分の部屋のベッドに倒れこむ。

その後、眠りに落ちてから、前日の夜更かしが聞いたのか、帰りのホームルームが始まるまで、2時間近く寝ていたようだ。そして、恭平と一緒に帰ろうと誘われたが、今だ気分が乗らないので、それを断り、ホームルームが終わると同時にすぐさま帰宅した。

「……」

ボーっと天井を見て今日の事を考える。

恭平の事。定山の事。そして、僕の事。

（散々だったな。まだ人の視線はちよつと怖いや。足がすくむとか、我ながら情けないな……）

でも、やっぱり恭平はすごかった。一人でおどおどしてたのも嘘みたいだ。ジャージを返すという自分の方が空気だった。定山と話せて相当嬉しかったんだろう。

早いが、もう僕は用済みだろう。むしろ居たら迷惑だ。明日からはいつも通りラノベを読んでもよう。

「そういえば、ラノベも溜まってるな……」

明日持つて行くラノベを吟味しつつ本棚に手を掛ける。こうして本棚を弄ると、ふと気になったラノベを取り出して読み返してしまっるのが僕の悪い癖だ。そして、今取り出したのは「中二病でも

い」という物だった。

「……」

話は変わるがラノベや漫画、アニメがやになることがたまにある。それは現実との相違をいやでも感じてしまう事だ。例えばこのラノベはいつまでも中二病を煩わっている女の子がクラスから孤立していた。そこに一人の理解者が現れて、クラスにも馴染み、恋仲になるという話だ。

だが、実際はどうだ。世界はそんなに甘くない。理解者は現れない。例え現れたとしても疑いの目で見てしまう。そんなクズみたいな僕と話をしてくれるのは同じオタクのみ。そしてそのオタクもクラスではぶられる。

世界は甘くないのだ。

「……ふう、やめたやめた」

ラノベをベッドに放り投げて再び体をベッドに投げ出す。
(何考えてんだ僕は……)

好きものすら信じられない自分に本当にやになる。

〃

ふと、携帯が鳴った。どうやらメールみたいだ。ちなみに曲は〇

only raiigun.

「ん、何だろう？……まあ、いいか」

沈んだ気持ちのまま携帯を見る気にも慣れず、いつの間にか眠りに落ちていた。

「やっべ、寝ちゃったか……」

時計を見ると、どうやら2時間近く寝ていたみたいだ。そこで、携帯が光っているのが見える。

「ああ、そういえばメール来てたんだっけ」

携帯を取って開いてみると、Eメール3件と表示されていた。受信ボックスを見て驚愕した。

「定山!?!」

何で定山からメールが!?!ああ、アドレスさっき教えただけ……ってそうじゃねえ!何でメールがくる!特に用はないだろう!!よし、まずは落ち着こう。そして、メールを見よう。話はそれからだ。

from 定山

件名 こんにちは

いきなりのメールすみません。本当は帰り道、一緒に帰ろうと思
ったのですが、既に教室にいなかったの……その代わり、相良く
んとお話して帰りましたが。ジャージの件ですが、もしかして昨日
遅くまでかかってしまったのではないですか？

調子が戻り始めた気持ちがあまた萎えるのが分かる。やっぱり恭平
か。(ていうか気付いてたんだ……うまく隠せてたと思ったんだ
けど)

次のメールはその30分後に来たようである。

f r o m 定山

件名

あまり調子が良いように見えませんでしたし、目に隈があったの
で、心配です。返信だけでもくれると嬉しいです。押し付けがまし
くてすみません(汗)

あつ、成る程。目に隈があったのか……気づかなかった。

f r o m 定山

件名 迷惑でしたか？ 迷惑でしたでしょうか？すみません……で
も心配です。何処が悪くないですか？返信待ってます。

）
）

読み終わったところで、丁度新着メールが届いた。

(まさか……)

f r o m 定山

件名

迷惑かけてすみません。

やばい、急にメールが短くなった。よくよく考えれば2時間以上、定山のメールを無視してるのか。

さすがに僕相手でも自分のせいで夜更かしをしたとなる気分悪い
か。でも4通もメール……そこまですて身の潔白を証明したいか。

ああ、また思考がネガティブに……

(いかにいかに。とりあえず返信しないと)

そう思い、新規のメールを作成する。

f r o m 黒田

件名 大丈夫です

目の隈があつた事には気づきませんでした。あなたのせいではな
いので、気にしないで下さい。返信遅れてすみません。

よし、こんな感じでいいだろう。何か素っ気ないか？

「……」ピッ

結局、文面を変えずに送った。

〵
〵
〵

「おわっ！で、電話!？」

返信を送ってもものの数秒で、定山から電話がかかってきた。ちなみに着信音は残酷な　のテーゼ。

「……もしもし」

『も、も、もしもしゆっ』

「……」

噛んだ。めっちゃテンパってるみたいだ。

(何なんだよ……本当に)

『えっと、夜分遅くに申し訳ございません。一緒に帰ろうと』

「その話はメールで見分かってるから」

『あっ、み、見てくれたんですね!』

「まー、メール来てたし……」

『そ、そうですね……』

会話終了。気まずい。何なんだこれは。

「返信遅れてすまなかった。じゃ、おやすみ」

そう言っただけで引き留めてくる。

(僕なんかを引き留める理由ないだろ……)

「……何ですか」

ちよつと不機嫌な声が出てしまったかもしれない。

『…っ！あ、えつとジャージありがとうございました』

電話越しに息を飲む声が聞こえた。ちよつとまずかったな。

「別にジャージ借りたのは僕だし、お礼を言われる筋合いはないよ」

極めて冷静に返答する。これが定山ファンなら狂喜乱舞して熱く語るんだろっけど、生憎僕は違うし、好きでもない人に愛想を振り撒けるほど器用じゃないし、なりたくもない。

『でも、ほとんど寝てないですよ。今日、普段より疲れた顔をしていましたし……』

どうもこの人は心配性みたいだ。ここはちゃんと否定しておかないとな。

「これは僕が自分で招いた事だし、次の日体育がある人に借りたのだから今日、返すのは当然です。何度も言うけど、貴方のせいではありません」

『将史くん……』

「……それに、恭平と帰れたんだからよかっただろ」ボソッ
『えっ、なんでしょうか？』

「いや、何でもない。気にしないで」

『？』

危ない危ない。心の声が漏れてしまった。どうやら定山には聞こえていないみたいだが。

「……」

『……』

また沈黙。もう電話切っていいるだろうか。

『あのっ！』

「はい」

何か意を決したようにこちらに話かけてる。電話越しにもいっぱいいっぱいなのがある。

『また……』

「？」

『また、電話を掛けてもよろしいでしょうか!?!』

「!?!。ああ、別にいいですよ。返事は遅れがちになるかもしれないが」

そんなことに何をあらたまっているんだ……。

『ありがとうございます!では、また明日、学校で。今日は話せて楽しかったです』

「ああ、また明日」

そういつてこちらから電話を切る。何だかこちらから切らないといつまでも通話中なきがした。

(何か、どつと疲れたな。本当、いったい何なんだよ)

「……」

「うっし、またラノベ探すか」

気をとり直してまたラノベを探す。

(しかし、定山ってあんな感じの子だっけ?もっと落ち着いてる印象があっただけど……)

定山は学校のアイドルであり、性格もおしとよか。あんな慌てる姿は見たことがない。定山にも人にはみせない違った一面があるようだ。

「まっ、いつか。どうせもう関わる事はないんだし。恭平も一人で何とかなるだろ　おっ、このラノベ懐かしい」

手に取ったのは「ご　　二　宮くん」。そして僕はこのラノベをついつい全巻読んでしまう。

「この主人公、毎回大変だな……」

僕はオタクでいい。人と関わる事が苦手でも

「次は何を読もうか」

僕には漫画やアニメ、ラノベがある。

「これなんかどうだ？」

定山だって、きっと恭平にだって違った一面がある。自分がオタクだからって……人とは違う趣味があったって、過去に何があったって、恥じる事なんてない。

気づいたらいつもの思考に戻っているようだ。さっきまでのネガティブな思考が嘘のようだ。

(これも定山の電話のおかげかもな……)

こうして僕は黙々とラノベを読んだりして道草をくいながら、次の日の準備をするのであった。

秘密

「定山さんと一緒に帰りたいたい！」

「……は？」

「だから頼む！この前みたいに力を貸してくれ！」

あれから数日。すっかり調子を取り戻し、中間テストも終わり、いつもの日常に戻りつつあった。

恭平はあれから定山の教室に度々（しょっちゅう？）行き、定山と楽しく話をしているみたいだ（恭平談）

僕はというと、最初のジャージを渡して以来、定山のクラスには行っていない。行く意味もないし、行くのもちよつと怖いし。

でも何でか分からないが、定山は僕を見かける度に、僕に話しかけようとしてくる。（その度に周りの視線がきつくなるから、無論逃げるが……）

ちなみに、あんなに意気込んでいたが、あれから定山からのメールや着信は一回もない。

そういう事情もあって、定山と恭平は結構うまくいってるんだと思っていたが……

「……いや、僕にじゃなくて、普通に定山に頼めよ。仲良くなったって自慢してただろ」

「そこまで仲良くなったわけじゃない!!」

「ドヤ顔で言うな!」

仲は思いの外、進展していないらしい。正直、僕が協力しなくても定山なら誘えば一緒に帰ってくれそうなもんだけど。

「分かった。協力するって言っちゃったからな。協力するよ。ちなみに結構は今日」

「そういうと、恭平は驚いて飛び上がった(比喻ではなく)今日!?!」

「一緒に帰るのに明日以降にしたって仕方ないだろ」

「でも心の準備が……」

「そんなこと言ってたら何時までたってもできないから。今日で決定。異論は認めない」

「わ、分かったよ……」

「こちらが強く言つと恭平も渋々了承してくれた。きっと恭平にも思い当たる節があるのだろう。」

「……で、恭平は定山を誘うほど仲良くないんだよな」

「ああ」

「……という事は、一緒に帰ろうって誘うことは」

「出来るわけがない!!」

こいつ……考える気あんのか？あつ、ないから僕に頼んでんのか。でも、誘えないとするとやれる事は一つしかない。オタ知識もへったくれもない。

「……校門にはりこむ」

「えっ？」

「定山と一緒に帰るための作戦。誘えないならこれしかない」

誘えない以上、これしか方法はない。

「作戦の内容は」

まずホームルームが終わったら校門まで急いで行く。その後、定山が出てくるまで僕と恭平は待機。出てきたら、偶然を装いつつ一緒に帰る、という実にシンプルな内容だ。

教室にしないのは、教室でばったりって言うのは無理があるし、恭平の友達に囲まれる可能性があるし、何より知り合いが多くて恭平が恥ずかしいらしい。

その内容を伝えると

「やっぱすげえよ！まさ！」

めっちゃめっちゃ絶賛された。作戦と言えるほどのもんじゃないんだけどなあ。

作戦も決まった事だし後は放課後まで待つだけだ。

「しつかりやれよ、恭平」

「おう！」

返事だけはいいんだけどなあ。

「来ない……」

「ああ、来ないな」

「……」

「……」

「何で！何で来ないんだよ！！もしかしてもう帰っちゃったのか！
？俺と帰るのはいやなのか！？」

「ああー。うるさい」

時は流れて放課後。自分のクラスのホームルームが終わってから、
僕達はずっと校門に張り込んでいるが、そろそろ最終下校時刻なの
に定山が通らない。

「帰ったって事はないだろう……教室も覗いたらホームルーム中だ

「たじやん」

「そうだけどよー……」

僕達は待ちぼうけを食わないように、この間の反省を生かして、定山のクラスがホームルーム中である事を確認して出てきた。

この学校には裏門はないから、必ず学校の何処かにいるはずだ。

「定山さんどうしたんだろう。定山さん……」

恭平もさっきからこの調子で色々と限界そうだ。

「恭平はここで待ってて。ちょっと教室見てくるから」

「なら俺も」

「あほ。入れ違いになったらどうする。もし僕がいない間に定山が来たら、僕を置いて帰っていいから」

「でもそれじゃ」

「あほ。それじゃ、何の為に待ってたのか分かんないだろ」

「あほあほ言うなや……分かったよ。頼んだぞ」

話しがまとまったところで恭平と一旦別れて、定山の教室に向かった。

教室への階段をてくてくと歩いていく。最終下校も近いせいかな、今んとこすれ違った人は誰もいない。

（誰もいない学校ってやっぱり不気味だな……ていうか、定山は本当にいるのか？）

恭平にはああ言ったけど、本当は裏門をなかったとしても、校舎から出る方法はいくらでもある。実は、定山が学校にいる可能性はあまり高くなかったりする。

もう中間テストも終わったから残っている意味ないしね。

程なくして、定山のいるクラスの教室に到着する。しかし、ここで僕は後悔する事になる。どうせ誰もいないだろうと思っていたため、中を確認せず。ためらいもせず、勢いよくその教室の扉を開けてしまったのだ。

繰り返し言うが、正直、後悔している。

ガラガラ

「……………」

「……………」

しかし、こういったシュチュエーションはよくラノベや漫画、ア

ニメでよく見かけるな。

例えば、はない。これは、ぼっちの主人公が図書館で遅くまで勉強していて、その後教室に戻ると、ヒロインの一人のめっちゃめっちゃ残念な姿を目撃してしまう。

そして、なし崩し的にそのヒロインとその愉快的仲間達とののはちやめちやな生活に身を投じていく、という話だ。

「……………」

「……………」

つまり、何が言いたいかと言うと、人には誰しも隠したい秘密の一つや二つあるってことだ。はないのヒロインはメンタルがたくましさぎたので問題なかったが、リアルではそうもいかない。

だってそうだろう。例えば必死で隠していたエロビデオが見つかったら死にたくなるだろう。

つまり、といつつ話しがそれてしまった。で、結局、何が言いたいのかというと

「……………」

「……………」

「……………スターライトブレイカー？」

そう、教室にいた生徒

定山が箒を持ちながらノリノリでな

はのキャラまねをしているのだ。ちなみに服装は普段の制服姿。それでも僕がスターライトブレイカーだって分かるってことは、かなりのクオリティであるということだ。

「……／／」カア

定山の机の上にはな はの漫画が置いてある。

ああ、成る程。あれに触発されて、つい教室でキャラまねしちゃったってわけか。

と、予想外の事態すぎて逆に冷静になっていた。

「い……」

「い？」

「いやあああー……！！！！」

「いたっ」バンツ

定山は大声で叫んで、僕を押し退けてそのままものすっつっぐい勢いで走りさって、教室を出ていってしまっ。

「……」

(すごい大きな声だったな……ていうか、周りに誰もいなくてよかったな。こんなの見られたらフルボッコだよ……)

「っていつか、そんな冷静に考えている場合じゃねえよ！！」

あんな恥ずかしそうにして、しかも逃げ出したんだ。その様子は

尋常じゃなかった。

まるで、この世の終わりに直面したような絶望の形相だった。ノックくらいすればよかった。

(こつこついう時、現実を思いしらされる……)

もし、写 眼があれば先読み出来たのに。瞬 があればあつというまに、定山に追いつく事が出来たのに。もし……もし、僕が主人公ならこんな逆境、すぐにひっくり返せるのに。

たった一瞬の戸惑いが取り返しをつかない時もある。今がそんなんじゃないのか？

しかし、そう思っても時すでに遅し。僕の足では定山にはもう追いつかない。

これが主人公なら それこそ恭平だったのならば、あるいわ定山のことを追いかけていたのかもしれない。「明日……また明日、定山と話せばいい」

そう、妥協案にすぎりつく。つくづく自分の事が嫌になる。

そう決めて恭平のもとに戻った。もしかしたら恭平が定山と会ってるかと、びくびくしていたが徒労に終わった。

やっぱり定山は正門を通らないルートで帰ったようだ。

恭平は僕と合流した後も、「定山さんはいたか？」やら「定山さんと帰れるかな？」やら興奮していた。

そして、最終下校の時刻をとうに過ぎてから、一時間近くたとうとしてから、ようやく僕達は帰路についた。恭平は僕の異変を気にしていたが、僕は終始上の空だった。

「……ふう」

部屋に入るといつかのように身をベッドに投げ出す。

「……」

僕は気になっていた。定山の事が。恭平のような明確な好意ではない、ましてやスターライトブレイカーでもない。

（あの時　　）

あの時、定山は泣いていた。

何故だか分からないが、その事だけが、ずっと頭の片隅で引っかかっているのであった

いぎ、定山邸へ！

「……………」

「定山さん、今日は休みなんだってさ……………」

翌日、定山の教室を覗いてみたら定山は教室にはいなかった。その後、周りの話しを聞くと、どうやら定山は今日は休みらしい。体調不良で今日は休みだそうだが、それは嘘だろう。昨日あんなに元気で、しかもあんなに全速力で、大声で叫んで、いたのに、今日に限って調子が悪くなるなんてありえない。

(やっぱり……………昨日のあれが原因なんだろうな……………)

どう考えてもそれしかない。あの教室スターライトブレイカー事件(僕命名)。おそらく、自分がそういう趣味である事を周りには知られたくなかったんだろう。

「なあ、まさ。お前までどうしたんだ？朝から変だぞ？」

正直な話し、定山の気持ちは頭では分かるが、根本的なところで分かっていない。

「おーい」

「……」

オタクというのが、世間一般では風当たりが強いのは、誰よりも分かっているつもりだ。

でも僕はオタクである事に誇りを持っているし、過去にそれによつて救われた事もある。

「まさ……無視しないでくれよ……」

「悪い悪い。ちょっと考えごととしててさ。後、無視されたくらいで泣くなよ」

また思考に没頭してしまった。本当、悪いくせだな。

「な、泣いてないやい!!」

「じゃ、さっきぬぐった水は何かな、君」

「き、気のせいだろ!」

「……」

その後、恭平と他愛もない話しをしていると先生が来たため、恭平は席に戻って、僕は次の授業の準備を始めた。

(今更うだうだ考えたってしょうがないよな。明日、定山が学校に来たら話そう。明日になればさすがにくるだろう……)

結論から言うと、僕はあまりにも楽観的に考えすぎていたのかも
しれない。

なぜなら、定山は翌日になっても、その次の日になっても定山は
来ることはなく、結局この一週間姿を見せる事はなかった。

「……………」

今、目の前には凄い豪邸がある。いや…………これを家と呼ぶのはお
こがましいかもしれない。僕には西洋風の城にしか見えない。

「……………これ、マジで定山の家か？」

そう、これは定山の家である。今まで定山の家を知ろうとした人
は誰もいなかった。追跡しても撒かれるらしい。

それなのになぜ、僕が定山の家？を知っているかというと 特
に理由はなく、先生に住所を聞いただけだ。何でもこれまで尋ねて
くる人はいなかったそうだ。

…………なぜ追跡（という名のストーカー）をするのに先生に聞かぬ

い。単に聞き忘れたのか、追跡する状況に酔っていたのか分からない。だが、何にせよ

「バカすぎるだろ……」

とりあえずそういう背景で僕はここにいる。それにしても

「マジで乃 坂家みたいだ」

オタクっていうのも合致してるしな。

「……」

やっべ、入るの緊張してきた……

「ていうか、呼び鈴何処だ？」

そんな感じに入り口付近であたふたしていると、後ろから声を掛けられた。

「あの、どちら様でしょうか？」

「おわっ!」

突然声を掛けられて、大声を出してしまった。ちょっと恥ずかしがりながら振り返るとさらに驚くべきものが

「……メイド？」

「?はい、そうですか?」

うん、まああれだ。予想はしていたよ。でも本当にいるんだな、

メイド。

「……用件は？」

そうだった、僕、不審者に間違われてるんだっけ。

「あ、えっと、僕は黒田将史っていういます。あの、定山……さんの家がここで、えっとだから、休んであのっ、言いたい事があって」

何かぐだぐだだった。死にたい。これで理解出来るやつはいないだろう。

「つまり、いづみ様に話したい事があってこちらまでいらっしやっただご学友、ということですね」

「……」

わかつちやっただー、何で分かるんだー……。

「……」

顎に手を当てて考え始めるメイドさん。

(うーん……何か迷ってる？ていうか、困ってる？まっ、そりゃそうだよな。完全に僕、変質者の変態だったからな……)

「あつ、えっと、何か突然押し掛けちゃったみたいなんで、また出直し」

迷惑そうに見えたので、丁寧に断り願おうとして、そう言いかけたところ（決してこのでかい家？にびびったわけじゃないからね！）

「わかりました、ではいづみ様のもとへご案内します」

「してきま えっ？」

「ですから、ご案内します」

そういって、あのばかでかい門が開いた。自動のセンサーでもついているのかね。

「では、ついてきて下さい」

「……」

そろそろ本当に覚悟を決めたほうがよさそうだな。

「私の傍から離れないで下さい。遭難するかもしれないので」

「……えっ？」

家の中で遭難とか（笑）、でもそれを笑い飛ばすことができない敷地がここにはある。

「おわっ！」

時には、まさしく藪から蛇に襲われたり

「……ここは何処だ？」

予想外に歩くのが早いメイドさんに置いていかれ迷子（遭難？）になるなど、家？までの道のりは散々であった。そして、ようやく家の前までたどり着いた。

「ぜえぜえ……」

「ここが家の扉です。……どうしましたか？」

「ぜえ……いえ、ぜえ、何でも……はぁありません」

何でこの人はまったく疲れてないんだろう。

「では、中へどうぞ」

そういつて、家の中に入って行くメイドさん。僕もそれに習ってついていく。

「……うわ」

外観から想像していたけれど、中もまるで城みたいだな。

「……」

定山までの道のりはまだまだ遠いみたいだ（物理的に）。

「こちらがいづみ様のお部屋になります」

何度か迷子になりかけたけれど、その度にメイドさんに助けられてようやく部屋にたどり着いた。

「はあ、ありがとうございます、ございます」

例のごとくメイドさんは涼しい顔。

「……いづみ様は先週からずっと部屋にとじ込めています」

「……」

「ご飯も余り食べておられないみたいで……」

「……」

そこまでの状況……か。

「ですから、いづみ様をよろしくお願いします」

「……善処はします」

そういつて、メイドさんは一步後ろに控える。

「……」

ここは乃 坂のラノベを参考にやらしてもらおう。といってもほとんど参考にする事なんてないんだが、とりあえず部屋に入れさせてもらわなければどうしようもない。

ラノベであったように、部屋から出ない可能性は高い。とりあえず乃 坂を見習って出てこなければ、好物で誘ってみよう。

「……ふう……よし」コンコン

深呼吸して気合を入れてノックした。

「あ、えっと……黒田だけど、覚えてるかな？同じ学校何だけど……」

さすがにこれだけじゃ、返事もくれないか？

「えっと」

「……将史くん？」

話を切りだそうとした時、予想外に定山のほうから声が聞こえた。

「……!」

「……」

メイドさんも驚いているみたいだ。こんなに簡単に返事が来るとは思わなかったのだろう。

「えっと……ほら、もう何日も休んでるから心配です」

「……」

「……だから、その」

周りくどい言い方はだめみたいだな。なら、直球勝負でいこう。

「……」

「……あの時の……先週のあることで、定山に話したいことがあるんだ」

正直、これは定山の傷をえぐってしまい、余計に部屋に引きこもってしまふ可能性がある。

なのに、どうしてそこまでしたかというと、特に理由はない。強いて言うなら、このままではいけないと、漠然と思ったにすぎない。

「……」

(やっぱり、だめだったか……)

そう思って次なる乃 坂作戦を執行しようかどうかを思案しているよ

「……将史くん」

「!!何!?!」

また返事があった。

「話してあの時の……教室のあれだよね」

「そう、そうです!その事で話しがしたくて。ここで話すのでもいいから、少し話しを聞いて貰えないかな!?!」

今を逃したらもうチャンスはないと思った。だから、今この時に出来る事はやろう。

「無理なら返事もしなくていいから!だから、聞くだけは聞いてみてくださいれないから!?!」

(……何も反応はないか。なら仕方ないな。)

「先週の」ガチャ

扉を開けてくれないので、扉の前で話そうとした時、定山の部屋の扉が開いた。

「定山……」

「将史くん、入って……」

定山が少しだけ扉から顔を出しながらそう言ってきた。

「……………いいのか？」

「はい……………将史くんだけなら。それに、そんなところであの事を言われても困るし……………それに……………」

と言って、メイドさんのほうをちらっと見る。

(あー、成る程、聞かれたくないってことか……………)

「分かった。じゃあ……………」

そう言ってメイドさんのほうを回く。

「……………」
「コク

頷いて、その場を離れるメイドさん。察しがよくて助かるよ。

「……………」

その場からメイドさんが去ると、定山も部屋に入ろうとしてしま
う。

「……………失礼します」

さあ、ここからが本番だ……………

オタク

定山の部屋はなんというか、普通だった。普通といってもその大きさは桁違いだ。具体的にいうと、多分ここだけで、僕んちよりでかいんじゃないかと思うほどだ。

しかし、注目しているところは大きさではなくて、その部屋の装飾だ。何というか、オタクっぽくないのだ。

僕の部屋はポスターやらなどの物は、ほとんど置いていないが、本棚には漫画やラノベ、アニメのDVDやBDなどがたくさん置いてある。露骨ではないにしろ、オタクだという事は疑えない部屋だ。僕もそうだった部屋を想像していたが、だいぶ違う。

勉強するための机があつて、テレビがあつて（映画かこれは。学校にある上下に動くやつ）、ベッドがある（キングサイズ）。後はチプとデルやらぬいぐるみなどの小物が少々ある程度だ。可笑しなところなど、まったく見当たらない。

「意外……でしたか？」

「えっ？」

「ポスターとか貼ってないのは……」

「……まあ、意外って言えば意外だったな」

「……」

「僕はそこまでお金を持ってないから、ラノベとかを買うので精一杯だけど、定山は……少ないわけじゃないよな」

こんだけの豪邸で金に困ってたら、ただのバカだろう。

「えっと、私自身はそんなにお金があるわけではないんですよ」

「？」

「家の方針で自由にお金を使う事は出来ないのです。使えるのは月々の小遣いだけで、精々」

へえ、お金持ちの家にも色々な考えがあるんだな。もっとバンバン金を使ってると思った。

月々の小遣いを聞いても、そんなに僕と変わらない。……甚だ意外だ。お金持ちなのに金がないとはこりや如何に。

「……」

「……」

やっべ、会話が途切れた。何だ、この重苦しい雰囲気は。気まずい、気まずすぎる。

「……」

あつちからは、何かをリアクションしてくれる気はないようだ。むしろ、こつちから何かを言ってくれる事を期待しているような気がする。

(うーん……どうしたもんかな。といっても、こっちから切り出さないと不味いよな。もとはといえば、僕のせいだしな……)

「先週のこと何だけど……」

「っ！」「ビクッ

うつ向いていた定山は目に見えるほどびくついた。未だにうつ向いたままだ。

「あれって、やっぱりそういう事何だよな」

一応、確認の意味を込めて、再度確認する。

「オタクってことなんだよね？」

「……」「コクッ

やっぱりそうだったんだな。

「で、僕に見つかって オタクってばれたのがショックで、あの時逃げ出して、今日まで学校を休んでいたって事であってる？」

「はい……」

僕の考えと大幅に違いはないな。おそらく、定山は自分がオタクって事を隠していたんだろう(そうでなければ、知らないはずはない)。

それで、僕に知られ ここからは推測だが みんなに、学校中に広められたか思っているんだろう。

まあ、世間一般では、隠す事が普通みたいになってるからな。

「勘違いしているみたいだけど……」

「？」

「定山がオタクな事は誰にも言っていないから」

「……えっ？」

一瞬何を言ってるんだか分からないような顔で、こっちを向く。

「オタクって事を広めてないってこと。多分広められたら嫌なんじゃないかなーと思って……」

「……」

驚いた顔で、こちらを向いてくる。

(やっぱり広めると思ったのか、心外だ……でも普通そう思うか。定山のこんな話)

「まっ、例え言ってたとしても信じてくれないよ。僕は底辺で定山は頂点なんだから」

「……」

「ま、まーとにかく、僕しかこの事知らないから問題なし。とりあえず学校に來い、な。何かこっちが悪い気がするし……」

「本当に？」

「ああ

「嘘じゃない？」

「うん

「……」

「……」

「はあー……よかった」

心底安心している様子だ。これで定山も学校に来れるようになるだろう。

「もし、みんなに知られちゃってたらどうしようかと思ったあ」

緊張の糸が解けたのか、定山がいつもよりも調子よく話し始める。

「将史くんに知られちゃった時は本当、もう終わりかと思ったよお……」

それにしてもみんなにはれていないと知ったにしても、ちょっと過剰反応しすぎじゃね？

「本当は、こついつた事も早く止めなきゃいけないと思ってるんだけど……」

みんなが知ってないって言ったけど、僕は知ってるんだぜ？

今は言っていないけど、これから先もばらさないとは限らないんだ
ぜ？

それに、オタクを隠す人も今まで見たことあるんだけど、ここま
で隠す人も珍しいな……やっぱりアイドルってイメージが大事なの
かもしれないな。学校のアイドルも大変だ。

どちらにしてもこれで此処にいる意味はない。早々にずらかろう。

「じゃ、定山、僕はもう帰るか」

「あのような物は子供のうちに卒業すべきもので、それをまだ好き
な私は恥ずべき存在です」

「……」

何だと？

「あんな低俗なもの……学校でばれたら一貫の終わりでした。あんな
な忌むべき物……」

コイツイマナンテイッタ

「それでも止められないあの魅力は認めますが、やっぱり止めなく
ては……お父さんもそういうのに否定的だし……」

「……」

「これをきっかけに、オタクである事を止めよう　　将史くん？」

何が乃　坂に似てるだ僕も見えない。設定が近くても根本的
なところで違う。

「将史くん？」

定山は こいつは二次元じゃなく三次元だし、春 と違ってド
ジツこでもない。しかし、そんなことじゃない。

「……な」

「将史くん？すみません、よく聞き取れ」

「ふざけるな！……！」

「……！」

こいつは言うてはならないことを言った。

「低俗だと思っているのか？」

「えっ？」

「嫌いだと思っているのか！？」

オタクを隠す事はいい。世間では知られると差別や侮蔑の目で見られるから仕方ない事なのだろう。そんなのは大勢いる。

しかし、オタクというのはそれが大好きな人種だ。愛していると
言っても過言ではない。

時にはそれに命を賭けるやつだっている。オタクとはそういうやつだ。

なのに、こいつは

「隠すならまだしも、嫌い…だと、嫌いになるだど？」

「将」

「お前は!?!」

定山が何かを言おうとしていたが、それを遮って、さらに声を荒らげて言った。

「お前は好きだから!!好きだから教室であんなことをしていたんじゃないのか!?!」

「……」

「好きだから!!危険だと分かっているもやっちまったんだろ!!」

僕だつてたまに、無性に真似てみたくなる時があるから分からないくはない。

それはやっぱり、僕がオタクだから。そして、定山もオタクだと思っていた。

「お前にとってアニメは、漫画はラノベは大事な物じゃないのか!?!」

「だ、だか」

でも、それは間違いだった。こいつはアニメ、漫画、ラノベの事を低俗だと言った。嫌いになるとも言った。

親が良い顔しない?周りオタクということがばれる?知るかそんなこと。

「いや、もういい」

「……え？」

「こんな事で怒る何て情けないな」

「将史くん？」

そうだった。何でこんなことで怒ってた。怒る必要ないだろ。
なぜなら

「お前はオタクじゃない」

「……」

驚愕の目で目を見開いている。

「オタクはオタクである事を隠したがったとしても嫌いにはならな
い」

「……」

何て事はない。たとえな はの真似をしても、断言してやる。
こいつはオタクじゃない。ただのオタクぶってる糞野郎だ（女だか
ら野郎ではないが）。そんなやつ、キレる価値もない。

「もう一度言う。お前はオタクじゃない」

「ま、将」

何かを言おうとしているが聞く気はない。さっさと此処からでて、こいつとおさらばしたい。

「僕はオタクだ。根っからのな。その僕が言うんだ。よかったじゃないか、お前はオタクじゃない。努力するまでもなく、オタクを止められて。あ、オタクじゃないんだっただな。んじゃ、僕は帰るから。邪魔したな」

そういつてもう用事はすんだ。もう此処に居たくないという事を隠しもしない不機嫌な態度で、定山に背を向けて帰ろうとする。

「ま、待って将史くん。違うのっ、そうじゃないのっ、お願い、話を聞いてっ!!」

「僕に話しかけるなっ!!」

「!!!将史くん!!」

定山の言葉を一刀両断して封殺する。

「……とにかく明日は学校には来い、それだけだ」

そういつて今度こそ部屋から出ようとする。

「待って、話を」

ボタン

定山の言う事を無視して、部屋を出る。

(話しかけるなって言っただろ……)
こうして僕は定山の家を後にするのであった。

「……ふう」

「……将史様」

「おわっ!」

定山の部屋から出ると、さっきのメイドさんが気配を消して立っていた。心臓に悪い。

「……そんなに驚かれなくてもよろしいのでは?」

「……」

(いやー……そんなこと言われても……そう言うなら気配を消して現れないで欲しい……)

そう思ったが、シツコむじとはせずに言いつべき事を伝える。

「……あの」

「はい」

「いづみさんの事なのですが……すみません、恐らくはダメだと思います」

「……そうですか」

(最後にちよっとキレちゃったしな。何か言おうとしてたのに無視しちゃったし……)

「……いづみ様は」

「はい?」

「いづみ様はお元気でしたか?」

「……ええ、部屋に引きこもっていたわりに元気そうでしたよ」

「そうですか」

本当に心配してたんだな。といってもまったくの無表情だからよく分からないけど。

「……」

「……」

「……では、僕はこれで」

「……いづみ様はこれまで、ご学友を家に招いてくることはありませんでした」

「……」

メイドさんが話し始めたので帰る事を止め、話を聞く。

「私どもはいづみ様には学校でいじめられてるのではないかとともに思いました」

「いや、そんなことは」

「はい、学校まで調査に行ったので承知しております」

うわぁ……調査だって。すげえな。

「ですので、家まで来て説教までしてくれる友達がいて、とても嬉しく思います」

ばれてるじゃん。この人、立ち聞きしてたんじゃないだろうな。

「説教といってもただ僕の思うところを言っただけですし、そんなに定山 いづみさんとは仲良くありません。だからメイドさんが思っているような友達と言えるかどうか……」

このメイドさんがあの事件を知っているか分からないのでそこは隠して、思っていることを言った。

「それで良いのです。今、将史様のような方が必要なのです。今後ともいづみ様をよろしく願います」

「……」

その問いに、気楽に首を縦に振ることは僕には出来なかった。

「……」

「……」

「……では、これで……」

「待って下さい」

再度帰ろうとしたら呼び止められた。まだ何かあるのだろうか。

「私の名前はメイドさんではありません。メイドですが」

「は？」

「私の名前は光坂つくしと申します」

「……黒田将史です」

「以後、お見知りおきを」

そういえば、僕達ってまだ自己紹介してなかったんだっけ。……
今更自己紹介ってどうよこれ。まあ、もう会う機会はないだろうっけ
どね。

「……本当にこれで」

そう告げて、定山邸からやっと出ることに成功した。

門からでて、一人で帰路につく。

(それにしても今日は色々な事があつたな。でもやることはやった……か微妙だけど、こつちからやれることはもうない。許せ、恭平) そんな事を考えながら帰り道を歩いていると自宅に到着した。

「少し言いすぎたかもな……」

きつとあつちにも何かしらの言い分があつただろうに、ばっさり切り捨てしまった事が頭に残る。

父親が反対しているとか何とか言っていた気がする。それに他にも何か理由があつたのかもしれない。そういった状況でオタクでありつつけられるだろうか。

「……いや」

やっぱり僕は止められないだろうな。断言出来るが嫌いになることもないだろう。

さっきはああ言ったけど、本当に嫌いには見えなかった。

「止めた、止めた。もう僕には関係ない」

もう一生関わる事はないんだから考える必要はない。

「……寝るか」

きっと明日からはまたいつもの日常に戻るだろう。
そう思いながら僕は眠りについた。

日常…やっぱりそうでもないです

一晚開けて翌日。昨日の事があって 認めたくはないが、定山のことを考えていて ほとんど眠ることが出来なかった。

それに昨日、定山の家に行き行って謝りに行ったわけだが、本当に今日、来るかどうか分からない。結局、怒鳴りちらしちゃったしな。

それに、恭平にも悪い気がする。定山が休んだ先週から恭平の姿は見るにたえないものだった。あつちでそわそわ、こつちでそわそわ。教室に誰かが入ってくるたびに、何かを期待して覚醒する。そして、入って来た人を見るとまた落胆して席に戻る。

他にも色々と珍行動を恭平はとっていたけれど、ここでは割愛しておこう。恭平の名誉のためにも。

そして、今教室の自分の席に座っている。色々前置きが長くなっってしまったけれど、結論からいえば、定山は翌日から何事もなかったように学校に来た。

……何事もなかったというのは少し語弊があった。定山が登校してきた時は、さながら大名行列のようであった。

「……はあ」

結局、昨日までの悶々とした日々や、昨日の夜にあれこれ考えたことは無駄だったってことだ。

「ていうか」

昨日、僕が行った意味なかったな。時間を無駄にして切れただけだしな。

それに、これだけ人気者なんだ。きつと僕が行かなくても、そのうち誰かが家を調べあげてお見舞いやら何やらしに行くだろう。定山とはそういう立ち位置にいる奴だ。

さっき定山のクラスに行って覗いてきたところ、クラスメイトに囲まれて質問攻めにあっていた。昼休みの今もたいして変わらない。それどころかもっと大変なことになっているかもしれない。

「まさ、一緒に飯食おうぜ」

恭平が飯の誘いに来た。片手には弁当を持っている。

「別にいいけど……」

そういつて手をぶらぶらさせる。

「あ、成る程。何も無いってわけね」

「そういうこと。ちょっと購買に行つて買つて来るから待つてて」

「あ、じゃあ。飲み物買つてきてくんない？金は後で渡すから」

「……何買つてくんの？」

「サンキュー。ペプシ頼むわ」

「……りょーかい」

そういつて後ろ手を振りながら、教室を後にする。

僕達の高校の購買は何て言うか、至って普通の購買だ。どこぞの漫画のように血で血を争うパンとり合戦（笑）なんてものもなく、名物になるような物もない。

ただ、パンと軽食、紙パックの飲み物などが売っているだけである。

余り料理が得意ではない僕はわりとここのパンで昼飯をすますことが多い。ちなみに僕のオススメは焼きそばパン。理由は冷たくても美味しく食べられるし、安いしね。

「え〜と、確かペプシだったよな……僕はウーロン茶にしておこう」

購買のおばちゃんにペプシとウーロン茶、あと焼きそばパンを注文しとお代を渡す。

「これで300円以内なんだから安いよな」

貧乏学生には非常に嬉しい価格設定だ。……早く料理も出来るよつにならないといけない。

そんなことを考えながら歩いていると、前方に人だかりが見えてきた。

(…あれは)

人混みの中心はほとんど見えないし、声も聞こえないけれど、大体誰があを中心にいるのかは想像がつく。

(あえて横を通る必要はないな。少しだけ遠回りになるけど、こっちの階段から行こう)

そう決めて、曲がり角を右に曲がろうとした時、人混みの中から一瞬だけその姿が見えた。その瞬間、タイミングが悪く定山と目があってしまった。

「……」

気にする事の話しでもないだろう。昨日あれだけの事を言ったんだ。もう話す事はないし、あっちも話したくないだろう。

「……せ……ん」

後ろで何か話している声が聞こえる。そのままそれを無視して歩いていく。

「……」

後ろから慌ててついてくる気配を感じる。追い付かれないようにペースを上げながら歩き去ろうとする。

「……くん」

「……」

「将史くん!」

「……」

「将史くん!」

無視し続けていたら定山が僕の前に来て声を荒らげる。

「……何でしょうか?」

出来るだけ感情を出さずにそう言った。

「……!」

しかし、定山は何かを察したのかひどく悲しげな、ちょっと怖がっているよいな顔をした。

待つこと数秒、覚悟を決めた様子で定山が話しをしてくる。

「え、えっと昨日のこと…何ですけど私のい」

「昨日がどうかしましたか?僕達会いましたっけ?」

定山の言葉を遮ってそういう。こいつは昨日、僕が定山の家に行ったことを普通に話そうとしていたが、冗談じゃない。そんなことしたら聞き耳を立てているギャラリーに取っ捕まって尋問と拷問をされるに決まっている。全部ゲロるまで何をされるかわかったもんじゃない。僕はゴメンだね。

それに、定山とは話したく無ければ顔も見たくない。

「……二度と話しかけないでくれって言ったでしょ。それに状況を見て話して下さい」

忠告の意味を込めて、周りには聞こえない程度の声で定山に話しかける。

「……す、すみません」

ようやく自分の迂闊さに気付いたのか小声で誤ってきた。これ以上の厄介ことは御免なのでその場を後にしようとする。

「ま、待って」

定山の言葉を遮るように予鈴がなった。

「早く教室に戻ったほうがいいですよ。それとも僕を遅刻させたいんですか？」

ここぞとばかりに話しを切り上げる。嫌味が入っているのはご愛敬だ。

「……わかりました」

渋々といった、まったく納得のいない様子で定山は言った。

「では、僕はこれで」

周りの人の羨望と嫉妬の視線もきつくなってきたし、そうそうにその場をとんずらす事にする。

まったく、本当に何なんだろうね。

定山の家に行ってから数日がたった。もう関わる事がないと思っていた彼女の行動理由が分からない……まあ、実際は何となく分かるんだが。

飲み物を買う帰りのコンタクトの後も定山は僕に何かと話しかけようとしてくる。はつきり言って迷惑以外の何者でもない。出来るなら恭平と話してくれ。喜ぶからさ。ま、人前で話しかけることはかなり少なくなったけどな。

とにかく、定山はあれから何度も話しかけてくる。そして、それを僕は無視する。

最近の定山は僕のせいかわからないけれど、無視するたびに元気がなくなってきたている気がする。ちよつと罪悪感を感じないこともないけれど、まあ、それとこれとは話が別だ。

「まさ、一緒に帰ろうぜ」

「分かった。ちよつと待ってて」

時刻は放課後。帰ろうとしていたところ恭平からのお誘いがかかった。拒否する理由もないので一緒に帰ることにする。

「よし、お待たせ。んじゃ、帰ろうか」

「今日、まさの家行っていいか？」

「？別にいいけど、どうしたんだ？」

「いや、今日は月曜日だろ……だから」「あー……成る程。ジャンプね、了解」

「あざーす」

恭平はオタクではないと言ったけど毎週月曜日には僕が毎週購読しているジャンプを読みに来る。意外と漫画好きなのだ。そんなに漫画が好きなら自分でジャンプくらい買えっと思う。

恭平は僕と違って家族と一緒に暮らしているから小遣いを余り自由に使えないみたいだ。そういう時に一人暮らしの仕送り生活は便利だと思う。夜遅くまでアニメを見てても文句は言われなし、夜遅くまでゲームを買いに並んでも怒られないしな。……何か僕のせいでじわじわと恭平がこっちの道に踏み込んで来ている気がする。

何か申し訳ない。

「……最近、遊びすぎて小遣い減らされちゃったんだよな……はあ」

「……それは…何というか…御愁傷様です」

「……サンキュー」

何か本当に申し訳なくなってきたなあ。

「ま、実際小遣いが減っても困ってないけどな!!」

「さっきの反省を返せこの野郎!!もうジャンプ読ませてやんねーぞ!!」

「申し訳ございませんでした!!」

そういつて恭平は頭をものすごい勢いで下げてる。まったくすぐ調子にのるのがたまに傷である。

そんなくだらない事を話しながら、下駄箱に行き、靴を履き替えて下校する。

「……なんだありゃ？」

「どうした？」

恭平が聞き返してくる。正面の正門には黒塗りの車（あんな長い車、初めて見た）があり、その周りにはこれまた黒服のお兄さん達がいる。そんな光景を周りの生徒達は遠巻きに眺めているという、何とも力オスな光景になっていた。

「うっわ。あんなの初めて見たぜ」

相方も初めて見るらしく、物珍しがっている。興味津々で今にも近づいて行きそうだがさすがの恭平もあれに近づくには抵抗があるのか、近づこうとしない。一瞬近づくかと思っただが徒労だったようだ。

波風を立てないように僕達は他の生徒達と同じく、遠巻きに見るだけにしてその場を後にしようとする。

「……目標を確認」

ちょうど横を通った時にそんな声が聞こえる。ん？目標？はは、目標になる人はかわいそうだな。こんな黒づくめの人達にさらわれたら、きつと薬を飲まされ、見た目は子供、頭脳は高校生の某小学生にされてしまうよ。本当に不幸だな。

ん？何か僕達の方に近づいてきたぞ。はっ！まさか目標って言うのは恭平の事か！いったい何をやらかしたんだ。

んん？どうして僕を囲むんだい？何恭平を安全地帯までエスコートしているんだい？

どうして距離を縮めて来るんだい？肩を掴むなよ、痛いじゃないか。

そして、そのままズルズルと引きずられ、連れ去られていく僕。

「いやー！た、助けてくれえー恭平ー！！」

「まさーカムバークー！」

「うーやー」

何で僕？とか、このまま連れ去られて南国で社会福祉活動か？やらいろいろ頭の頭に浮かんだけれど、何よりも

（黒服がいると自分が拉致られる。テンプレってこういう事か）

と、ちよつと感動している人がいた。ていうか僕だった。

みんなの好奇心な目線と恭平の見送りのもと、黒塗りの車に乗せられた。

本当、いったいどこでフラグを立てたんだろうなあ……

再び定山邸（前書き）

一月ぶりの更新。これからも更新は遅くなるかもしれませんが。

再び定山邸

「……」

こんにちは、黒田将史です。今、僕は生まれて初めて黒塗りの車に乗っています。中は非常に広いです。何てったって大の大人が二人と僕が座つても広々している。正面に向かい合わせの席があるしね。

……まあ、現実逃避していても仕方がないから、今の現状を報告すると、僕の両隣にはグラサン掛けた黒づくめのお兄さん方がまるで僕を見張るように、逃げられないように構えている。他には運転手がいるだけだ。……どうせ乗るならもつと穩便に、楽しく乗りたかった。

それに、半ば連れ去られるかんに乗せられたので行き先も知らない。まさか、東京湾で海底探索ツアーにご招待とかないよな。

現実に目を反らしてばかりじゃいられない。そろそろ聞き出さないとな……頑張れ、僕っ！

「……あ、あのぼ　いや私どもはいたい何処に行くのでございましょうか？」

「静かにしろ」

「はい」

すみません、無理でした。

そこ、ヘタレとか言わない。だってめっちゃ怖いよ。威圧感半端

じゃないよ。何か言ったら物理的にぶちっとやられちゃいそうだな。

「いづれ分かるから大人しくしている」

「はいっ」

顔に納得出来ないような表情でも浮かんでいたのか黒服の一人がそういった。いかん：顔に出したら不味いな。ポーカーフェイスだポーカーフェイス。

でも何も言わなくても、こっちに少なからず敵意みたいな物を感じる。僕、何かしましたっけ。

「……」

「……」

恭平！。もたもたしてないで早く助けてくれえ。

「……」

あれから車を走らせる事、数十分。僕の目の前には巨大な城がそびえ立っていた。ていうか、定山の家だった。また来てしまったなあ。

定山邸に着いたら、黒づくめのお兄さん達によって車からポイッと降ろされ、そのままその人達は行ってしまい、現在、門の前に一人ぼっちである。さっきの状況よりは一人ぼっちの方が何倍もましだけ。

それにあの人達の僕を降ろす時のあの形相。サングラス越しからも分かる「何かしたら沈めるぞ」とでも言いそうな無言の威圧。やば、思い出しただけでチビりそう。一体僕が何をしたって言うんだ。それに、拉致紛いの事をして、定山は何を考えているんだ？

「…それにしても、一体どうすればいいんだ？」

目の前には相変わらず巨大な門。右を見ても、左を見ても家を囲っている城壁しか見えず、人っこ一人見当たらない。

ここで降ろされたって事はきつと定山に呼び出されたって事なんだろう（強制）。ま、話したくても学校では無視してたからなあ。こんなことなら話しを聞いとけばよかつたか？

「そうだとしても入れないよな？インターホンないし……」

人もいないし、無理矢理開ける何て余計に出来るわけないし。

「……もう、帰っていいかな。僕、正直、定山と会っても話す事ないんだよね……ていうか、会っても困る。何言われるか分かんないし、本当に帰ろう」

「お待ちしておりました」

「おわっ！！」

帰ろうとして、門に背を向けて歩き出そうとしたところ背後から光坂さんが声を掛けて来た。

「何をそんなに驚いているのですか？」

心底不思議そうな顔で尋ねてくる。そりゃ、ビビるよ。誰もいないと思っていたところに、いきなり気配を消して現れるんだもん。……ていうか、さっき確認した時は誰も通りにいなかったよな。どうやって現れたんだこの人。まさか飛んで来たのか？

「いえ、将史様が帰ろうとした時に合わせて門を飛び越えました」

「忍者ですかあなたは！ていうか、人の心の中を読まないで下さいっ！！」

漫画でも基本的にはメイドさんはスペックが高いのが相場だけれど、現実のメイドさんってのもこんなにスペックが高いものなのか。

「……いや、それほどでもありませんよ／＼」

「……もういいです」

もう、人の心を読むとか、顔を赤らめるとか、照れるとこじやないし誉めてもないって言う諸々のツッコミはなしの方向で。

「……結局、僕をここに連れて来た（強制）のって定山 さんの

差し金なのでしょうか？」

このままでは本題から逸れてしまいそうなので、早速本題に入る。

「いえ、いづみ様は将史様を連れて来たことは存じておりません」

「？」

ん、どういう事だ？定山が呼び出していないんだったら、誰が呼び出したんだ？……まあ、よく考えれば定山がここまで強行策に出る必要はないわけで。

「じゃ、一体誰が僕を（強制的に）連れて来たんですか？」

「誰だと思えますか？」

「……いや、分からないから聞いているんですが」

一体何なんだ、この人は。

「正解は私、光坂つくし本人でした。わー、ぱちぱち」

「……で、結局、何でここまで連れて来たんですか？」

話が逸れすぎて忘れそうだが、光坂さんが連れて来たにしても何で連れて来たんだ？まあ、多分………というか絶対定山のことだろうから行きたくないなあ。

「立ち話も何なので中へどうぞ」

「いえ、おかまいなく。ここで結構です」

「立ち話も何なので」

二回目を言ったら家の門が開場した。

「……わかりました、ではお邪魔します」

もう逃げられそうにない。それならうだうだせず光坂さんに従うのが賢いだろう。どうせ拒否権なんてないんだしね。

案内されたところは、この前来た時の定山の部屋ではなく（当た

り前だが）別の部屋に通された。定山の部屋ほどではないにしても、その大きさはかなりのものである。（もちろん僕の部屋よりもでかい）

部屋の中にはシングルベッドが一つに、テーブルとイスのセットが真ん中にあり後は本棚などが鎮座している。

しかし、注目するのはそこではない。部屋の至るところにくま、ねこ、いぬ、とりなどなど、様々な種類のぬいぐるみがところ狭しと置かれているすごいファンシーな部屋だということだ。

一体この部屋は誰の部屋なんだ？

「この部屋は私の部屋でございます」

「光坂さんの部屋なんですか？」

「はい、本当は客間のお通しするべきなのでしょうけれど、私の独断で連れて来てしまったので。メイドなのに部屋があるのは、当主の意向でメイドにも一部屋ずつ与えられています。まあ、そんなにいませんが」

成る程。つまり定山家当主はメイドさん一人一人に部屋を与えるほど器の大きい人ってことか。

そして、このファンシー使用の部屋も光坂さん使用か。光坂さんがぬいぐるみを抱いてかわいがっている姿……似合わねえ。

「今、何か失礼な事を考えてませんでしたか？具体的には似合わない部屋だとか」

「い、いえいえ全然、まったく持って完璧にそんな事は思っていないでございます、はい」

そうだった、この人って心読めるんだ。迂闊な事を考えるのはもう辞めよう、うん。

「そうですか、それならばよろしいです」

そういつて部屋の中に入って行く。二回しか会っていないから当然なのかもしれないが、この人まったく表情を変えないで段々と作業をこなしているな。何を考えているか分かりやしない。そのくせ、冷たそうに見えるけど実はお茶目で可愛いものが好きだってわかる。

「……なんだかなあ」

人を見かけで判断しちゃいけないって言うけど、本当のことだって最近よく思い知らされるな。

「……僕を呼んだのは定山さんの事ですよな？」

僕とこの人の接点なんてそれくらいしかないしな。

「お察しの通り、いずみ様の事でございます」

やっぱりそうだったか。多分、家族にもあの事は秘密にしているだろうから、何があったのか聞きたいんだろうしな。

「申し訳ありませんが、約束がありますので何があったのかは言えません」

「いえ、何があったのかは知っています。大方、教室でキャラまねしていたところを将史様に見られたってところでしょう。約束はそれをばらさない……とかでしょうか」

あれえ？あの事　あの趣味　については秘密なんじゃなかつたっけ？それとも僕の考え間違ってた？

「いえ、いづみ様はあの事を隠していますよ」

「では、何で知ってるんですか？」

「メイドたるもの、いつ如何なる時でも主人を守れるようにするものです」

そういつて、エプロンの中から小型のトランシーバーのような物を取り出してこちらにどことなく、誇らしげに見せてくる。

「といっても、そこまで細かく知っている訳ではありません。将史様はいづみ様について何処まで知っていますか？」

盗聴機をつけていても、四六時中聞いているわけでわなののか。

「……別に、特に何も聞いてないですよ。知っている事は定山があいっ趣味を持っていて、辞めようとしているって事くらいです」

本当はその趣味を低俗だと思っていらしいけど、そこまでは言わなくていいだろう。

「そうですね……」

「……」

一言そう言っつて、光坂さんは何やら考えごとを始めたようので、無言になる。

光坂さんが何を考えてるのかは知らないけれど、こっちは定山と話す事はないし、このまま此処にいたら定山と鉢合わせしてしまいかねない。

もしかして、この人はそれを狙っているのだろうか。

「将史様」

「はい？」

考えがまとまっていたのか、いつもの無表情な顔をこっちに向けて声を掛けてくる。

「これから話す事はあくまでフィクションです」

「は？」

いきなり何を言い出すんだこの人は。

「実際の人物とは何ら関わりはないので、そのつもりでお聞き下さい」

「はあ、分かりました」

考えこんだと思ったら、急によくわからないことを言ってくる。一体何なんだろうね。

「このお話は、ある一人の女の子のちょっとばかり昔の話」

再び定山邸（後書き）

次は定山の過去話です。いつ投稿出来か分かりませんが……感想
くねると嬉しいです。

過去編1（前書き）

もう少し長くする予定でしたが、切りがいいのでこの辺で投稿します。

少々短いですが読んでくれると幸いです。

余談ですが感想ありがとうございます！この場を借りてお礼を申し上げます。

昔々、といつてもほんの数年前の話し。ある小さな町に一人の女の子が住んでいました。

その子は地元ではお嬢様学校と言われている学校の中学2年生でした。

女の子は何をしても非常に目立つ子でした。

勉強をやらせれば常に上位に食い込む。スポーツをやらせてもそれは同じでした。また、お嬢様学校に通う中でも彼女の家柄は1、2を争う名家であり、彼女はますます注目される存在でした。

また、そういった家柄や才能に、まったく鼻にかけず、分け隔てなく周りと接していたため、いつしか彼女は学校屈指の人気者になっていました。

今から話すのはそんな女の子の過去の物語

「きりーつ、礼！」

「ありがとうございました」

一日の最後のホームルームの挨拶が終わる。学生達には待ちに待った放課後。

「ふう……」

この女の子もその一人。この学校は名門と言う事だけあって、授業内容の密度も濃く、進度も早いためかなり集中していないと忽ち遅れていってしまうのだ。

そのため、例え勉強が出来る生徒でも授業だけでかなりの負担になってしまっているのだ。それに加え、この女の子は成績も上位のため人よりも気を張っていたのだろう。

「おーい、一緒に帰ろう」

「うん、いいよ」

「あ、ずるい！私も」

「私も！！」

「ふう、分かりました。ではみんなで帰りましょう」

ある日の放課後、女の子はいつものように授業が終わって帰ろう

とすると、これまたすぐに周りのクラスメイトの女の子達に囲まれる。そしていつの間にかちよつとした人ばかりが出来てしまった。何時もこの女の子は周りの人を惹き付ける。だからこのように少々被害が広まってしまふ事も多々ある。

「と言っても校門の迎えが来ているところまでですが、一緒に行きましょう」

この学校では、学校の特徴ゆえに、校門まで車で迎えリムジンに来ている人達も多い。いづみ様もその中の一人。だから、校門までというわけだ。

その女の子はそのままクラスメイトの友達と一緒にゆっくりと、今日の学校での出来事や近くに新しいお店が出来たから一緒に行こう、やら今度の試験は範囲が広そうだね、などなど他愛もない雑談をしながら、下駄箱を通って校門へと向かう。

校門に着くと何台かのリムジンが止まっていた。その中の一つ女の子が自分のリムジンとその隣に立っているメイドさんの姿を見つけると友達の方に振り返って言った。

「すみません……迎えが来ているようなので私はこれで……」

「えー、もっとお話ししましょうよ」

「これからお茶でもしていきませんか？」

「本当に申し訳ありません。これから少し用事があるので……。また明日お話ししましょう」

そういつて丁寧な、しかし決して嫌みには不思議と聞こえないように言う。

「絶対ですよー」

「今度、新しく出来たお店に行きましょね」

「はい、楽しみにしています。その時にまた誘って下さい。ではさようなら」

そう言った後、もう一度頭を下げた迎えの車へと小走りで向かうと隣に立って待っていたメイドさんが軽く頭を下げ、女の子を出迎えた。

「おかえりなさいませ」

「はい、ただいま戻りました」

そう軽く挨拶を交わしてリムジンの中に入ると、運転手は衝撃が起きないようにゆっくり発進する。「今日の予定は16時からピアノのレッスン、17時30分から茶道の講義があります。その後は夕食をとってもらって、19時から舞のレッスンとなっております」

「はい、分かりました」

学校から帰ると常に何かしらの習い事が大体入っている。勉強もその間などに行っており、かなりの負担になっているだろうけれど、嫌な顔一つしない。

「今日の、夕食は何ですか？」

「お腹が空いたのですか、お嬢様？食いしん坊ですね」

「も、もう、つくしさん／＼」

お嬢様はこんな風に時折雑談を混ぜて私に話しかけてくる。きつと学校でもそうなのだろう。

最近では送迎中に雑談をすることは日課になっている。私に気を使ってるのかもしれないが、お嬢様の本心は分かりません。きつと周りの空気を読むのに長けているのもあるでしょうが、ただ、私と話したいっていう理由もあるのでしょうか。

本当に大したものです。

雑談する事数十分。程なくして定山邸に到着する。

「お待たせしました」

「いつもありがとうございます、つくしさん」

そう言いつつ頭を下げてから小走りで家の中に入って行く。きつとこれから始まるレッスンの準備でしょう。

走って行く後ろ姿を見送ってから、車を止めに行くために、車へと向かった。早く止めて、夕食の準備をしなければ。

時刻は夜21時30分。本日の最後のレッスンである舞の練習は少しだけ長引いてしまったけれど、概ね予定通りに滞りなく終わった。

その後、少しだけ話しをした後、部屋に戻った。そして、すぐに部屋にある机に向かい、今日の分の宿題と復習、そして予習にとりかかる。

「ふう……おしまい」

そう言っただけ私はい今日の勉強を終えて、教科書とノートを閉じる。ふと気になって机の上の時計を見ると時計は23時を少しだけ回ったところだった。

「うん、丁度いい時間ね」

そう呟いて、椅子から立って今流行りの薄型テレビをつけ、ベッドの上に置いてあるクッションを一つとってテレビの前に座る。そして、テレビのチャンネルをTOYO-Mに変える。

「よし、後5分……」

時計を見て再度時間を確認する。それを見る目の色は友達同士でも決してみせないような、キラキラ輝く子供のような目をしている。程なくして、コマーシャルが終わって新たな番組が始まる。時刻は23時30分。

「抱きしめたいんだ！（パンパンパン）」

「あ、始まった！」

画面からアニメのOPが流れる。それと共に画面を食い入るように見る。その目は今日一日の中で一番キラキラ輝いていて、すごく楽しそうに見える。

今までの様子は何処と無くよそよそしくて、少し無理しているように見えた。

しかし、今、アニメを見ながら見せている表情は本当に年相応の無邪気な表情をしていて、すごく自然体だ。学校にいたときよりも他の何処にいた時よりも。

「ちっちゃくないよ〜！」

「……ぽ らちゃん可愛いなあ」

そうこうしている内に、あっという間に30分がすぎて、番組が終わり、エンドロールが流れる。

「あーあ、終わっちゃった……」

少しだけ寂しそうな顔をしたが、またすぐに切り替えてわくわくした顔に戻った。

「よし、次はF TEだ！」

次に始まるものに期待を膨らませて画面を見る。

「始まった！」

そして、また新しくアニメが始まるとまた画面に注目して熱中し始める。

今から始まったのは今期最高のアニメと名高いらしく、先ほどよりもさらに熱が入っているようです。

「ふう、終わっちゃった……」

そうこうしている内にあっという間に時刻は深夜一時。次の日も朝から学校があるのに、少々遅くまで夜更かししてしまっただろうか。

一日の最後に明日の持ち物の最終チェックをする。

「……あ！明日、体育あるんだった」

アニメを見終わった後に荷物のチェックをするのは日課であり、このように忘れ物に気づく事も珍しくない。

といっても、それでも忘れてしまうくらいドジなところもあるのですけど。

その後、結局、他にも忘れ物が二、三見つかってそれを準備していたら時刻は深夜2時を回ろうとしていた。

「おやすみなさい」

そういって、ベッドの中に入るなり数分ですぐに寝息が聞こえ始める。

こうして慌ただしくも楽しい一日が終わった。

これが日常。女の子の中ではいつも変わらず、それであってとても楽しい日常。

学校で勉強して、友達と楽しく雑談。放課後に入るとたくさん友達と一緒に下校。そして、習い事と勉強。また、一日の最後に一番の楽しみであるアニメ鑑賞。

かつては当たり前だったほんの一部の日常の風景。人前で笑う事がまだ少なくなかった時。当たり前で、とても大事なキラキラ輝いていた時。そして、今では心から笑う事がなくなってしまった女の子。そんな当たり前前の日常が壊れてしまった現在。

今は　　といっても過去の話しだが、これからある未来なんて誰も予測は出来ない、前触れはこの時には正真正銘何もなかったのだから。

だから、もう少し現在いまへと繋がる分岐点が見えてくるまでもう少しこの女の子の物語を見ていこうと思う。次に見るのはここまでの

話しても少しだけ出てきたが、学校や家族の前でさえも見せない、女の子のオタクとしての一面。ありのままの自分が出せる世界に ついての話をしよう

過去編 1 (後書き)

過去編は3部で考えています。(伸びるかもしれないが)

次はオタクの時の日常です。多分もったいぶってて申し訳ないで

すが、次も進展がないかも……(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3333x/>

オタクの恋愛大作戦！！

2011年12月29日01時54分発行